それぞれの最終楽章

助け合いの町で 2

きょういく、きょうよう、ごきんじょさん

訪問診療でお年寄りを看取っているというと、多くの人から「元気で長生きする秘訣は何ですか」と尋ねられます。解は人それぞれでしょうが、私は「きょういく」と「きょうよう」と答えます。「教育」「教養」ではありませんよ。

漢字で書けば「今日行く」と「今日用」。畑やスーパーなど「今日、行く場所」があり、農作業をする、孫の子守をするといった「今日しなければならない用事」があるか。つまり、居場所があり、生活者として必要とされる役割があるか、が決定的に大事だと痛感します。

夫婦2人、そろって認知症になっても、最期まで家で暮らしたい。都市部なら介護施設に入るところでしょうが、ここは違います。

診療所から10キロ、山奥の集落で暮らす実さんは92歳。大腸がんの手術歴があり、心臓にペースメーカーを入れています。2015年夏から妻雪江さん(84)の物忘れがひどくなり認知症と診断されました。2人暮らしで介護は実さんの担当。年末に実さんを交えて関係者で会議を開きました。

永源寺診療所長　花戸貴司さん

1970年滋賀県生まれ。自治医科大卒。大学病院勤務などを経て、2000年から現職。著書に『最期も笑顔で』など。16年、へき地の若手医師を顕彰する第3回やぶ医者大賞受賞。

妻の暴言や一人歩きなど、いわゆる周辺症状がエスカレートして「精神的に追い詰められている」。さらに「頭の中で鈴がチンチン鳴っている」「もの忘れが多くなって困っている」と訴えました。実さん自身も認知機能が低下してきたのです。

周囲は「施設入所も仕方ないか」と思いましたが、本人は「2人で自宅で暮らしたい」と希望しました。足腰の弱ってきた実さんはデイサービスなどを使いつつ、妻の介護を続けることにしました。

昨年2月、実さんも神経内科で検査を受け、認知症と診断されました。雪江さんは、認知症の検査である長谷川式スケール（30点満点）で1桁とかなり進んでいます。それでも「2人で家にいたい」決意は変わりません。

ご近所さんの助け合いはここでも力を発揮しています。雪江さんが一人歩きをしても「散歩に行くのを見かけた」と見守ってくれます。ある日は、雪江さんが鍋にカボチャを丸ごと入れて、隣家をピンポン。「炊いて」。普通なら「何してんの」となるところですが、きちんと料理してくれました。また、深夜にご飯を持って「卵としょうゆがのうなった。貸して」。こんな時も怒らず、「ちょっと待っててね」。

近くに住む共働きの息子夫婦は朝夕顔を見せ、日中はご近所さんが見守る。まさに「ご近助」です。

実さんの「きょういく」と「きょうよう」は、自宅という居場所があることと妻の世話。認知症を抱えながら生活できているのは、この二つとご近助のおかげだと思います。

（構成・畑川剛毅）＝全6回

朝日新聞デジタルの医療サイト「アピタル」で、より詳しくご覧になれます。